

緊急事態宣言のなかで考えたこと

日頃より、NPO 法人道の活動にご協力賜り、心より厚く御礼申し上げます。

新型コロナウイルスがやっと終息の兆しが見えてきた感がありますが、皆様には無事にお過ごしのことと存じます。

さて一時期、日本も「第二の武漢になる」「2週間後はニューヨークのようになる」という国民の不安をいたずらに煽るような予測が、まことしやかに語られましたが、日本国内で感染爆発は起きませんでした。

日本の『生ぬるい』と言われた新型コロナ対応が上手くいっている不思議の理由の一つとして挙げられているのが、「全体としては、相手を気遣い、人との距離を取り、握手を避け、清潔を心掛ける日本の文化」だという論があります。

清潔を心掛ける日本文化と聞いて、皇居の賢所^{かしこころ}（神殿）にお仕えする内掌典と呼ばれる女性たちの中に残る平安時代からの古いしきたりを思い出しました。昭和18年より57年間、内掌典としてお仕えした高谷朝子氏の『宮中賢所物語』には、内掌典には、清浄でないことを「次（つぎ）」、清浄なことを「清（きよ）」と区別する「次清（つぎきよ）」という重要なしきたりがあることが書かれています。例えば外からの郵便物や宅配便などを受け取った時には、「次」となった手を必ず洗い清めます。その清める時も「次」になった手の平が触れることのないように握り拳にして手の甲で栓をひねって水を出す。清めた手は自分の衣服にも触らないようにすることです。食事の際、しゃもじが直にお茶碗につかないよう少し高めから、ご飯を落とすように静かによそいます。また外出用の衣類や髪飾りも厳然と分けられ、外出から戻ると直ぐに着替え、お湯殿でお清めします。この様な生活を、自らの自覚で規律を重んじ、ごまかしを決してしないそうです。まるで、新型コロナウイルス蔓延下でのお手本の様な生活です。

また濱口恵俊氏『間（あわい）の文化と独（ひとり）の文化』では、日本型集団主義を「協同団体主義」と名付け、「他の成員との協調や、集団への自発的なかわり合いが、結局は自己自身の福利をもたらすことを知ったうえで、組織的活動にコミットする」とし、それを支える要件として「集団の目標を達成するためには、各自の個別的な要求を断念し、皆が平等に、全体の利害に合わせる相互協力体制「人の和」を挙げている。今回の個人商店や中小企業の身を削る様な活動自粛を見ると、一部綻びかけているとは言え、「日本がコロナで世界の優等生」である一要因だと思います。

日本人は、時間的にも空間的にも「間（ま）」という感覚を作り出してきました。日本人の家のコンセプトには本来壁という概念が無く、柱と柱の間を「間」というわけですが、この柱と柱の間に入った戸を「間戸（まど）」といいます。日本家屋は、障子や襖を外せば大きな空間ができ、3密が回避されるわけです。今回の騒動でははからずも日常生活に人との空間的な「間」、時間的な「ひ間（ま）」が生じたわけです。

剣持武彦氏は「たいへん高密度化した都会生活のなかでしのぎを削っているものですから、「間」なんてのんきなことはいってられないということなのですから、それだからこそ、よけい「間」の感覚というものをつくりだしていくことが大事なのではないか」と『日本人と「間」』（昭和56年）で述べています。（岩立）